

令和4年(2022年)秋における外来魚稚魚生息状況調査結果

山本充孝・石崎大介・鈴木隆夫

1. 目的

2022年秋季の外来魚（オオクチバス・ブルーギル：以下、バス・ギル）当歳魚の生息（発生）状況を琵琶湖沿岸域での定点調査により把握する。

2. 方法

2022年9月28日から11月11日にかけて、琵琶湖沿岸域（水深7m以浅）の112定点（北湖75定点、南湖37定点）で調査を行った。調査は小型ビームトロール網（ビーム長4m）を小型動力船で曳網（底曳網）することで実施した。曳網速度は0.27m/秒を基準とし、北湖では5分間、南湖では3分間曳網した。採捕魚の体長組成から、バスでは標準体長150mm未満（北湖）、130mm未満（南湖）、ギルでは標準体長70mm未満を当歳魚として、その生息密度（曳網面積1haあたりの採捕尾数）を算出して、2007年以降の結果と比較した。

3. 結果

バス当歳魚の生息密度は北湖では過去2番目の高水準であった昨年から大幅に減少した{311尾/ha（前年比40.0%）}（図1）。南湖でも昨年から減少した{728尾/ha（前年比61%）}。

ギル当歳魚の生息密度は北湖では前年比276%の832尾/haと増加したが、南湖では過去最低水準の197尾/ha（前年比32%）となり、低水準が維持された（図2）。近年、バス当歳魚の生息状況が高水準になることがあり、生息量がギルと同程度～逆転する傾向がみられている。¹⁾ 今後、いかにバスの生息量を抑制するか、当歳魚の発生状況にも注目しながら検討する必要がある。

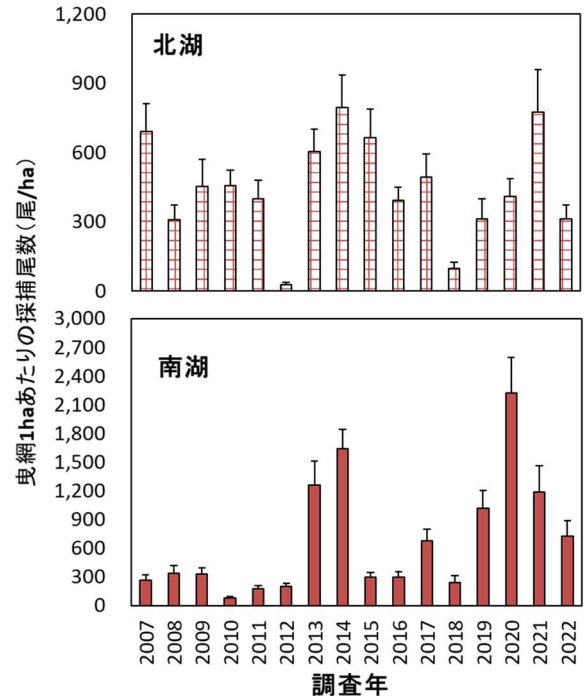


図1 曳網1haあたりのオオクチバス当歳魚採捕尾数の経年変化（エラーバーは標準誤差）

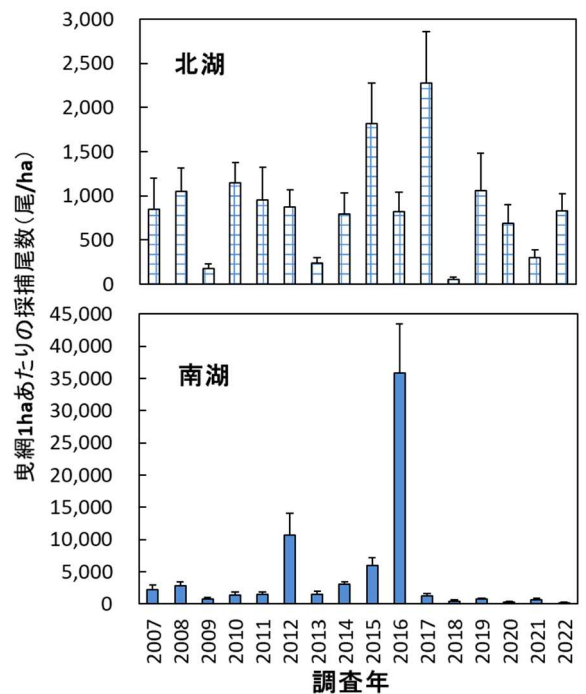


図2 曳網1haあたりのブルーギル当歳魚採捕尾数の経年変化（エラーバーは標準誤差）

1) 田口・山本 (2023). 令和3年度(2021年度)当初の琵琶湖における外来魚生息量の推定. 令和3年度滋賀県水産試験場事業報告, 74.